

遊と遊

漢 西嶽草山 野碑

題字 藤原鶴采編「書道」
(二五社)より作成

資料作製 NO.13 原田 唯夫

【遊】「遊」
ユウ・ユウ
あそぶ・あそぶ

形声 声符は旂、旂は氏族靈の宿る氏族旗を建てて、外に旅することを示す字、遊の初文、字はまた「遊」の流なり」とし、古文として遊の字をあけて

用いられた、のちまた遊の字が分岐して、遊は遊に遊行移動するものをいう。(詩、周南、漢廣)「漢遊女有り 求むべからず」とは、漢水の女神祭祀を歌うものである。(秦風、無田)も詩祭不明のものと思われるが、これも水神祭祀の歌で、女神を遊遊して遊遊歌歌するのには、女神祭祀の基本的な形式である、すべて自在に行動し、移動するものと遊遊しい、もと神靈の遊行に關して用いた遊である。わが國の遊部が、義祝として神事に与るものであったことは、遊の古義をなお存するものである。遊部、遊女なども、もと神につかえるものであった。うかれ・遊びは、すべて人間的なものを超える状態という原義であり、「あそぶ」という語も、そこから生まれる。神ともある状態をいう、すべて故郷を離れることを遊学、遊遊、遊子といひ、天子が地方をめぐめるを遊学、他界に遊遊するのを遊仙、心の樂しむを遊心といひ、(論語、述而)に「仁に依り、藝に遊ぶ」とあり、「藝に遊ぶ」ことを、孔子も人の至境としてゐる。

白川静著「字統」(平凡社)より

形声 12画

遊

ユウ・ユ
あそぶ

遊

遊

音を表すのは旂。旂は舛(吹き流しをつけた旗竿)と子とを組み合わせた形。旗竿を持つ人の形で、旗を立てて行くことをいう。旗には神靈が宿るので、神が自由気ままに行動することを遊という。遊は、もと神が「あそぶ」の意味であったが、のちに人が「あそぶ、たのしむ」の意味に使われるようになった。

福井県教育委員会編 小学校学習漢字解説本
「白川静博士の漢字の世界へ」(平凡社)より

漢 廣

南有喬木 不可休息
漢有游女 不可求思
漢之廣矣 不可泳思
江之永矣 不可方思
翹翹瞻游 宜知其所遊
之子于歸 百福共膺

目加田啓著「中國書藝全集大系」
詩經 漢 廣 P.110より

兼 限

兼限若 白露爲霜
所謂伊人 在水一方
遊淵從之 道阻且長
遊淵從之 宛在水中央
兼限委委 白露未晞
所謂伊人 在水之涘
遊淵從之 道阻且艱
兼限采采 白露未已
所謂伊人 在水之涘
遊淵從之 道阻且右
遊淵從之 宛在水中沚

目加田啓著「中國書藝全集大系」
詩經 漢 廣 P.110より

1191 【旂】。旂(旂) 旂(旂) 旂(旂)
【旂】(旂) 旂(旂) 旂(旂)

【旂】 英文と石鼓文には単独に存在したが、篆文は「游」の偏旁で、単独には存在しない。が本来あるべきものである。現に周礼の大宰の九賁の八、曰、旂、賁に残っている。この字は「旂に從い(意符)子(声符)」の形声字である。

【游】「以周切」(シウ・イウ)である。「子」がこの音を表わす。「子」(シ)の音が「シウ」音に、声転したのである。「シウ」の音の表わす意味は、水波の戯をなしていること、波打つ形をいう。

【游】 旗のふきぬきが波打つこと、形をなすをいう。説文に「旂の流(旂)」「游字の解」と言うのは、この「旂」字の解釈である。「游」字は「汗」字の繁文と見るべきで、「旂」字とは異なる。

1192 【游】 12 游(游)

【游】 説文では、「从水、游」と「汗(シウ・イウ)とに分解し、「从」に從ひ汗の声」の字と見ているが、これは誤りで、「水」と「旂」とに分解して、「水に從い(意符)旂(声符)」の形声字と見るべきである。

【游】「以周切」(シウ・イウ)である。「旂」がこの音を表わす。「シウ」の音の表わす意味は、「汗」字の「子」の音の表わす意味と同じく、波打つ旂の意である。

【游】 水の表面の戯液の進行する意である。「汗」の繁文の字で同じ意味である。旂旗の戯(説文の解)の本字は「旂」である。

1193 【遊】 12 (遊) 13 遊(遊)

【遊】 「遊」字は玉篇以後の字である。ここに出した古文の字形は、説文では「游」字と見ているが、この字に「走」字があると、ころをもってすると、「遊」字と見てもよい。古文の他の部分は、朱駿声に従って「水」と「子」との合字と見るべきであるから、説文通訓定声「まぎに「汗」(イウ)字である。「旂」(イウ)と「汗」が同音の字であるから、この古文は「遊」と同字と見てもよい。したがって、「遊」は「走に從い(意符)旂(声符)」の形声字と見るべきである。

【游】 「夷周切」(イウ)である。「旂」がこの音を表わす。この音の表わす意味は「水波の進行すること」で、前に進むである。【遊】 道路を歩く(意)と進む意とを合わせたこの字の意味

加藤常善著「漢字の起源」(角川書店)より

遊(遊) 4323 4832 ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

遊(遊) ユウユ
あそぶ

昔川「字源」に「遊」と漢字を大成を刊行され、漢語研究のお仕事も一切切りやめたと思っておりますが、白川さんは「遊」の世界と深く関わっていらっしゃいますので、白川さんに「遊」の世界と深く関わっていらっしゃることを追っていただければ幸いです。

遊がもの神である。神のみが、遊ぶことができた。遊(遊)は絶対の自由と、ゆたかな創造の世界である。それは神の世界に外ならない。この神の世界にかかわる人もともに遊ぶことができた。神とともにというよりも、神によりてというべきかも知れない。祝祭においてのみ許される荘嚴の態度と、秩序をこえた狂気とは、神に近づき、神とともにあることの証しであり、またその限られた場における祭神の特殊である。これは私たち人間の目標を示していたような気がしませんが、大きく思っています。ここに「遊」の語をもう一度白川さんからお願ひしたいのですが、遊(遊)の漢字はどんな字ですか。

白川 人が物を持って外に出歩くという形です。その旗は氏族の印で、そこには氏族の神様が宿る。自分が住んでいる本質の地を離れるときは、異なった神々がいる世界に入っていきます。それがだんだん定例的になって、決まった日に神を祀って祀る。それが祭りです。神はそういうふうにして浮かれるようにして出てきます。「遊」の古の詩「周南・漢広」に「遊に遊女有り 求むべからず」とあります。漢水に出て遊ぶ女があるというのです。従米の「遊」の解釈では、遊女というのを浮かれ女と解釈してしまっている。したがってその時が神を迎えて祀る祭りの歌であるという解釈ができなくて、浮かれ女ながら、求めることはできないという儲け的な解釈になってしまっている。しかし「遊」という字の本来的意味は、遊行する神の姿をいいます。神を迎えるのが祭りである。だから「遊」は人間が遊ぶのではなくて、神が遊ぶ。神は人間の愛情の対象として求めることはできない。また神を迎えて神と共に遊ぶのが遊の本来の姿です。この文は「遊」の神の姿を重ねてゆくつもりで、最初にその文章を出したのです。

谷川 その後、漢字論を引かれていますが、白川さんの話によると「遊」という字だと、白川(遊)という字は本来「遊」を示しています。七(化)と原から成っています。

漢 廣
不可休息
不可求思
不可決意
不可方思
言訓其能
言採其馬

兼 遊
白露爲霜
在水一方
道阻且長
宛在水中
白露未晞
在水之湄
道阻且難
宛在水中
白露未已
在水之涘
道阻且右
宛在水中

本文
白川 静著
「回風九十年」(平凡社)

遊(遊) 12画
遊(遊) 13画
遊(遊) 14画

遊(遊) 形用。音符は遊。旗(旗)吹流しをつけた旗(旗)の形と子とを組み合わせた形で、旗竿を持つ人の形である。遊・遊の字である。旗には神様が宿るので、神様が「ゆく」と、気ままた行動することを遊・遊行(ぶらぶら歩くこと)という。「説文」上「遊は遊旗(はた)の流(流)はたし」なりとし、また遊の字をあげている。旗がもとの字で、それに行くの意味のある遊(遊)に「遊」を加えた遊が作られ、また、およぐの意味の遊も作られた。遊・遊はともに「あそぶ」の意味に用いる。あそぶというの、もと神霊があそぶこと、神が自由に行動するという意味であったが、のち人が興のおもむくままに行動して楽しむという意味に用いられるようになった。

用例 遊郭・遊里 遊女屋が集まっている一區画。くるわ/遊戯 遊びたわむれること。また、幼稚園や小学校で行う簡単な遊びや踊り/遊興 おもしろく遊ぶこと/遊業 遊び楽しむこと/遊覧 遊びながら見物してまわること/遊山 山野に遊びに出かけること/交遊 友人などにつきあうこと

白川静著「常用字解」(平凡社)より

かつて白川さんに「遊」の連載依頼をお願いしたことがありました。そのころ、白川さんの雑誌連載は「遊」だけだったとおもいます。白川さんは誌名にちなんで「遊字論」を書かれた。

冒頭、こういふふうにあります。遊がもの神である。神のみが遊ぶことができた。遊は絶対の自由と、ゆたかな創造の世界である。それは神の世界に外ならない。この神の世界にかかわるとき、人もともに遊ぶことができた。そして、こうあった。遊とは、この隠れたる神の遊出をいう。

この連載は当初からたいへん好評だったため、それにつづけて「遊字論」も連載していただきました(ともに「文字道徳」に収録)。このとき、私は初めて「出遊する」ということを知り、「遊」と「道」とがほぼ同一の未知なる先方に向かっていく姿をあらわしている文字だということが納得できたのです。

松岡正剛著
「白川静著の漢字の世界」(平凡社)より

遊(遊) 遊(遊) 遊(遊)

遊(遊)は遊のものと字で、旗をもつ人の姿である。その旗は、氏族の標識を加えた旗徽であった。古代の人びとは、スズからの住むるすなな地を離れるとき、すなわちその守護霊の守護の範囲から外に出るときには、その守護霊を遷した旗旗を掲げて行動した。遊とは故郷より離れること、旅に出ることを意味する。旅に出るときには、二(二)五(五)奉ずるのである。旗はいわば、氏族の守護霊を斎いこめたものであるから、氏族(三)三(三)が出行するときには、そのもとで軍礼としての誓約が行なわれた。それが旗であり、旗とは軍事の共同体である。

字の形象からいえば、(氏)は氏族共祭の儀礼に因り(族)は軍事的盟誓の儀礼に因りしている。氏は祖先を中心とする族員の血縁的秩序、族は軍団結成の秩序に関する字とすることができよう。のちの用例の上からみても、氏は祭祀的、族は軍事的行動のときを用いられる傾向がある。わが国(ウリ)や(カ)にはほあたる語と考えてよい。兄弟朋友とは、氏族内の年齢階層的な同輩者をいう。助は前後に荷い分ける一連の貝をいう語であり、その象形字「友」の初文は「習」(まね)にほあたる語と考えてよい。上に両者の手を載せて、族盟を行なうことをいう。氏族員として、死生を共にする盟約のあるものを朋友といった。「兄弟に友に」というのが本義であり、同志を友とよぶ「論語」の用法などは、かなりのもの用語である。

白川静著「漢字百話」(中公新書)より

【遊】をめぐる漢字

白川静二氏は「遊」という字が、このほか好きでし...

「遊」の字は、この本の前巻で「遊」をめぐって漢字の由来を...

「遊」の字は、この本の前巻で「遊」をめぐって漢字の由来を...

「遊」の字は、この本の前巻で「遊」をめぐって漢字の由来を...

【遊】

このことを知って「遊」の感刺に及びました。...

「遊」は説明しようは「遊」の元字で、それに遊行く、...

「遊」に「遊」が加わった「遊」は、鬼神が川原に...

小川鉄郎著「白川静二さんに学ぶ 漢字は怖い」

遊



ユウユウ、あそぶ、すまじ、すまが

昔、大陸のある村で疫病が流行し、子どもや老人を中心に人々が...

「古い師よ、旗で村を取り囲んだのはよいが、これでどうなるというのだ」...

小林朝夫緒「本当は怖ろしい漢字」(彩国社)より

秋口湖上 薛 盤
落日五湖遊 落日五湖の遊
煙波處處愁 煙波處處に愁えしむ
浮沈千古事 浮沈千古の事
誰與問東流 誰ぞ母に東流に問わん

渡湘江 杜審言
運日園林悲 運日園林 悲遊を悲しむ
今春花鳥作邊愁 今春花鳥 邊愁を作す
獨憐京國人南望 獨憐京國人 南望せられ
不似湘江水北流 不似湘江の水 北流するに似ざることを

會山送別 皇甫冉
凄凄遊子苦飄蓬 凄凄たる遊子 飄蓬を苦しむ
明月清輝祇暫同 明月清輝 祇だ暫くは同にせん
南望千山如黛色 南のかた千山を望めば 黛色の如し
愁君客路在 愁う 君が客路の 其の中に在るを

秋意 許渾
琪樹西風枕笠秋 琪樹の西風 枕笠秋なり
楚雲湘水憶同遊 楚雲 湘水 同遊を憶う
高歌一曲掩明鏡 高歌一曲 明鏡を掩う
昨日少年今白頭 昨日の少年 今は白頭

右四首 前野直彬注釋「唐詩選下」(岩波文庫)

會員便り

— 學習 遠遊 近遊 交流 多彩な活動 —

「大漢和辭典」諸橋博士の色紙

神奈川県漢詩連盟事務局編 會報「漢詩神奈川」第19号 14頁より

生に色紙を何枚も書いてくれたらいいな。

P36 白馬篇 (白馬篇)
白馬飾金鞍
連翩西北馳
借問誰家子
幽并遊俠兒
少小去鄉邑

P229 鳳凰臺上鳳凰遊
鳳去臺空江自流
吳宮花草埋幽徑
晉代衣冠成古丘

P593 豐樂亭遊春三首
紅樹青山日欲斜
長郊草色綠無涯
遊人不覺春將老
來往爭前踏落花

P399 遊子吟 (遊子吟)
慈母手中線
遊子身上衣
臨行密密縫
意恐遲遲歸

P423 長恨歌 (長恨歌)
沈吟重色思傾國
承歡侍宴無閑暇
春從春遊夜專夜
後宮佳麗三千人
三千寵愛在一身

P839 永井荷風 (永井荷風)
滬上春遊 (滬上)
黃昏轉覺薄寒加
載酒又過江上家
十里珠簾二分月
一灣春水滿堤花

斷橋分手 明史鑑
近水人家半掩扉
兩山樓閣尚斜暉
斷橋無數垂楊柳
總被遊人折漸稀

送僧遊山 唐熊孺登
雲身自在山山去
何處靈山不是歸
日暮寒林投古寺
雪花飛滿水田衣

過靈湖 宋王十朋
誰把青銅鑿靈湖
湖光冷浸越王都
東風 月西銷客
買得扁舟入畫圖

遊仙 明洪楩
掛樹蒼猿剛叫呼
鮮侵石壁穿模糊
癡顛領下珠如月
照見寶中五嶽圖

園中雜書 宋陸游
殘花委地筍掀泥
茗椀香囊到處携
幽夢欲成誰喚起
半窓斜日鷓鴣啼

神漢遊叢書「七言絕句(二)から一步」より

今昔序 日 野 南 蘇
佐野光一編「甲骨文を讀む」(天來書院)より



諸星氏賜本「甲骨春秋戰國文字 基本部首彙編」より

尊彝壽千歲 弓矢游四方

小雨游魚出 東風燕子來

細小雨游魚出 東風燕子來
羅振玉編「甲骨文墨場必携」(木耳者)より



白川靜著「甲骨文の世界 古民殷王朝の禮儀」(東洋文庫)より